平成１６年６月１日発行

かまにし

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第１２号

わがまちの顔

蒲田の迷画伯　榎本光春さん

榎本光春79歳。自称「蒲田の迷画伯」。本職は看板業なのですが、人に頼まれれば何でも引き受ける町の便利屋さんでもあります。

先日も仕事場を覗くと、木製の箱のようなものを作っているところで…。翌日覗くと素晴らしい本箱が出来上がっていました。話を聞いてみると、近所の人に別注の本箱が欲しいと頼まれて作ったとのことでした。このような事は日常茶飯事で、本人は楽しんで作っているとのこと。そして、出来上がったものを喜んでくれた時、幸せを感じるそうです。

バブル時に、パビリオンに展示する模型や展示用の船舶の模型等を製作するため、数々の道具を集めたのが、今、趣味への道を開いたようです。

ベニヤ板に描かれた風景画、ターナー・ネオカラーという水性ペンキを水に溶いて使用してベニヤ板に絵画を描いていくのですが、仕上がりは色が落ちず油絵のような作品です。

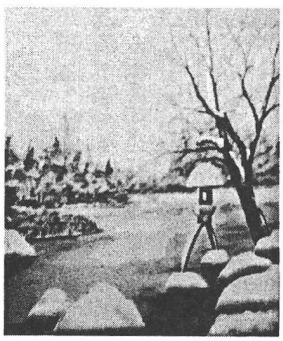
観る人に、感動という言葉が心の中に飛び込んでくるような気持ちにする絵画です。本人は絵を描くことは、ずぶの素人で人に見せるために描いているのではなく、あくまでも自分の趣味で、仕事の合間に描いているので、プロの目で見ると笑われると恐縮していました。

榎本氏は、神奈川県相模湖町の生まれで、17歳で志願兵となり、ラバウルへ出兵。終戦で捕虜の身となり、ラバウルで原住民に監視されながら毎日の労働は苛酷なものであったそうです。又、豪州の兵士がやって来て、兵士全員が囚われ、砂漠に立たされたり、食べる物もなく、マラリアの恐怖で不安な日々を過ごしたそうです。昭和21年3月に帰国。田舎に仕事もなく、蒲田でペンキ屋に身を置いて、看板・ペンキ塗り等、そこで現在の基礎を築き、その後、総合工芸社を設立。

絵を描こうとした動機は、丁度バブルも弾け、自分の時間が少しずつ持てる余裕が出来た頃から旅行会社のパンフレットを見ていて描いてみたかったと思ったのがきっかけのようです。取材旅行とかに行くには、時間的な余裕は未だに無く、仕事をリタイアした時には、是非、描いた所を廻ってみたいと思っているそうです。

絵画には、油絵・水彩・色鉛筆等いろいろありますが、ペンキで描かれた絵独特の仕上がりは、「蒲田の迷画伯」そのものである。出張所に何点かお借りして展示してありますので、お近くにお出かけの時には、立ち寄ってはいかがでしょうか。

（取材　伊藤・杉野委員）



「蒲田の迷画伯」の作品

日本工学院専門学校

蒲田の町は、戦前は松竹撮影所、戦後は日本工学院専門学校と共に発展してきました。

日本工学院専門学校の卒業生は創業後56年間で17万人を超え、それぞれの分野で大勢の方々が第一線で活躍されています。その卒業生の中からごく一部の限られた方を紹介させていただきます。（順不動、敬称略）

蒲田のネオンと学校と私

「全てがきらめいていた。なにはともあれ私の女優としての第一歩は、ここから始まった。そして、その全部が染み込んだ私というユニークな女優が、ここにできた。」

重田千穂子（1976年卒）

鹿児島県出身。演劇科を第一期生として卒業、昭和54年に劇団テアトルエコー入団、平成4年に退団し、現在は太田プロダクションに所属。俳優として舞台、テレビ、ラジオなどで活躍、特異なキャラクターで注目され、NHK総合テレビ「コメディーお江戸でござる」にレギュラー出演。本年4月より番組は「コメディー道中でござる」にリニューアルされた。

青木　秀臣（1961年、放送技術科卒）

㈱東宝演劇部音響担当として入社。東京宝塚劇場、帝国劇場等でサウンドミキサーとして活躍後、映像制作会社を設立。会社経営の傍らグレン・ミラー生誕地協会日本支部代表を務め、多くの日本プロ、アマバンドのフェスティバル参画に奔走。

高橋　巖（1985年、映像科卒）

特撮映画史に残る大作「帝都物語」に特技スタッフとして参加。フィルムとデジタルを自在に駆使した特撮作品に手腕を発揮し、「エコエコアザラク」や「ねらわれた学園」などのTV作品を演出。02年「インフィニティ∞波の上の甲虫」03年「八月のかりゆし」で劇場映画監督としてメガホンをとる。

岡田　勉（1990年、音響芸術科卒）

レコーディング・エンジニアとして関わった作品は多数あり。山崎まさよし、スガシカオ、福耳、我那覇美奈、杏子、宗次郎、広末涼子など、生の暖かい音作りが信条。

高村　信太（1997年、コンサート・イベント科卒）

日本有数のコンサートプロモーター、㈱ホットスタッフ・プロモーション営業制作部に所属し、浜田省吾、鬼束ちひろ、GRAPEVINE、黒田倫弘等アーティストのライブを企画、運営。

山田　卓司（1980年、美術科卒）

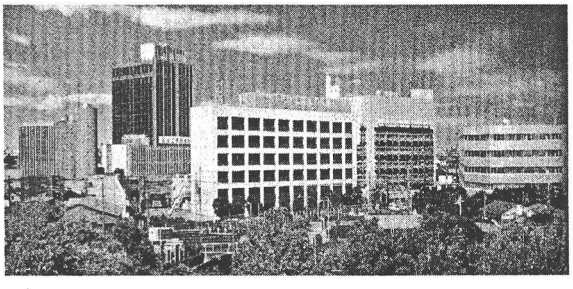
在学中に「月間ホビージャパン」に執筆を始める。80年、88年「タミヤ人形改造コンテスト」金賞、95年「ユーロミニテール」情景部門金賞、94年からテレビ東京「全国プロモデラー選手権」5回優勝、現在同審査員。

高橋　伸（1967年、放送技術部研究科卒）

秋田テレビに35年勤務。ローカルテレビ局の音声として、日本唯一の民謡長寿番組「クボタ民謡お国めぐり」を28年間支える。現在は「マスター」と呼ばれる放送監視人。

石丸　隆一（1979年、放送制作芸術科卒）

映画照明担当としてのデビューは「BAD GAY BEACH」で、代表作は「踊る大捜査線THE MOVIE」「阿修羅の伝説」など。98年第22回日本アカデミー優秀照明賞を受賞。



日本工学院専門学校校舎の全容

スタートは洋裁学校

蒲田・女塚の一隅に戦後まもない昭和22年、片柳鴻氏により現在の西蒲田5丁目に、戦災の

灰燼を払って創設されました。絵画科と洋裁科の2学科を擁する「創美学園」としてスタート。

56年後の平成16年、現在の「日本工学院専門学校」の学生数は約6000人、蒲田校の敷地面積約3万㎡、広大なキャンパスには12棟の校舎が建ち並んでいます。

日本テレビ技術専門学校開校と新校舎の建設

日本初のテレビジョン本放送が行われた昭和28年「日本テレビ技術学校」を設立。第一期生は80名で、夜間のみの3ヶ月課程として発足しました。

予想以上のスピードでテレビ時代が到来しつつあった昭和30年、学園はこれまでの実績をもとに、さらにテレビ技術者の本格教育に取り組むために「日本テレビ技術専門学校」と校名を変更し、従来の夜間部に加えて昼間部を開設し、従来の創美学園を廃園としました。

急増する入学希望者ばかりでなく施設機材の充実のためにも本格的校舎の建設を計画、隣接地561㎡を購入し、従来の敷地と合わせた1056㎡に新校舎（現1号館）を建設することになりました。新校舎1号館は昭和33年9月に完成、鉄筋4階建ての校舎には、普通教室10、実験室、教材室、教員室、役員室、事務室のほか応接室、休養室をおき、また実習機材についても整備して面目を一新しました。

東京オリンピックと日本電子工学院

昭和39年、オリンピック東京大会開催期間中、請われて約30名の学生がNHKの技術補助員として、水泳、マラソン、ボクシングの各競技のテレビ中継に参加しました。参加した学生たちは、当日の夕刻、NHK内の副調整室で再放送をみながら、全員が幾筋の涙で頬を濡らしたそうです。このことがらは学園の放送技術が高く評価を受けていたことを如実に物語っています。

カラーテレビ時代の幕開けという大転換期にあって、学園においても大きな転換の機運が高まり「日本テレビ技術専門学校」を「日本電子工学院」に改称しました。教育の対象が電子工学の一分野であるテレビ技術から電子工学全般にわたる教育を志向していることを明らかにする必要がありました。

さらに、昭和51年には、現在の「日本工学院専門学校」に改称。当時、学生数7500名、1～7号館までの校舎をもつ総合学園に発展していました。

現在は、さらに8号館～12号館まで増設。全館バリアフリーの医療系学科専用校舎、劇場、ホールなど多目的に使用できるデジタルオープンスタジオ、最新のコンピュータが並ぶデジタルラボラトリーなど、学生が実際の現場で即戦力となるための高度な技術を身につけられるよう、常に最先端の環境を提供しています。

昭和57年には北海道校を開校、60年八王子市に東京工科大学を、翌年には日本工学院八王子専門学校を開校しました。

科学万博・つくば85

昭和60年3月、茨城県つくば研究学園都市において開催された国際科学博覧会に、学園の研究成果の一つであるレーザー技術を活用した「レーザーディスプレイシステム」（レーザーテレビ）を健康スポーツ館に協力出展しました。これは科学万博において唯一のレーザーディスプレイであり、新聞やテレビニュースなどにも取り上げられ、大きな注目を集めました。

学外での実習も重視しており、地域と連携してさまざまな活動を行っています。毎年11月に行われる大田区主催の「OTAふれあいフェスタ」では、放送メディア科の学生がスタッフとして参加し、会場内の映像・音声をすべてまかされ、大田ケーブルテレビの生中継まで担当しています。また、大田区立矢口小学校で開催された「エコ・フェスタ　ワンダーランド」では、子どもたちが楽しみながら環境問題を学べるよう多彩なイベントをサポートしました。

このように、常に時代を意識しながら、地域社会への貢献も目標としている日本工学院専門学校。西蒲田の街で、今日も未来を担う多くの学生が勉学に励んでいます。

（取材　杉野・伊藤・滝口・柳通委員）

プロを目指す学生達

犯罪のない町へ
東矢口一丁目町会

醍醐　幸右衛門

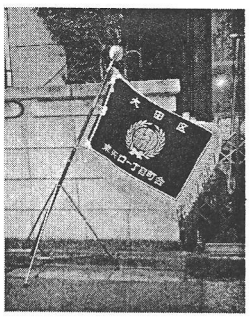
皆さん今日は！今回は、東矢口一丁目町会を紹介させて頂きます。

町会の場所は、池上線蓮沼駅に近く、多摩堤通りから池上寄りに位置します。蓮沼商店街に面し、碁盤の目のように道路が通っています。近くに小・中学校もあり、非常に住み易い所です。戦後、町会は「蓮沼会」と称していましたが、昭和27年の町名変更に伴い、「東矢口一丁目町会」となりました。

古くから住宅街として発展してきましたが、公園がありませんでした。私達が一番喜んだ事は、長い間希望していました公園が、平成10年に完成したことです。名称は「東矢口一丁目児童公園」です。この公園を舞台として、昭和27年から毎年欠かさず行っていた防災訓練を実施しています。初期消火から始まり、応急救護、通報訓練等、色々と行い、最後は避難場所である矢口東小学校まで歩いて避難しています。この事は、私達町会の最も誇りに思っている事です。

年間行事としては、防災訓練のほか子供のための日帰り旅行、敬老会も毎年行っています。年末には役員全員で歳末警戒を実施しています。また、町会の市民消火隊と婦人消火隊も毎月第二日曜日に訓練し、毎年10月の大田区市民消火隊の発表会に参加し、防災訓練の中でも日頃の訓練の成果を披露するなどしています。

現在、町会では防犯活動に力を入れています。マンションが多くできる中、住んでいる人とのコミュニケーションがあまりとられていないのが現状です。そのために池上警察署の方に、犯罪の被害状況を聞いて、犯罪を防ぐには何をしたら良いのか皆で考えています。その他、色々と行っていますが、一緒に住んでいる人達や役員の皆様との力で、これからも町会発展のために頑張りたいと思います。



東矢口一丁目町会旗

事務局からのお知らせ

大田区では平成九年七月からホームページを開設していますが、より地域に密着した情報を発信していこうと本年四月から南センターのホームページが開設されました。

南センターのホームページは、大田南地域行政センターに所属する各課や出張所等の情報が掲載されています。蒲田西特別出張所のサイトには、現在、最近行われた蒲田駅開業百周年行事や子どもガーデンパーティの様子が掲載されています。また、『かまにし17』の記事も掲載されていますので、興味のある方は是非、御覧ください。

大田区のホームページから入ると見つけ易いです。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，463人
	女	27，192人
	計	56，655人
世帯		29，199世帯

平成16年5月1日現在

編集後記

「わがまちの顔」は、『蒲田の迷画伯』榎本さんを紹介しました。仕事柄、看板関係の仕事が多く、画伯というよりは、下町の職人という雰囲気をもつ気さくな人柄と作品でした。。

特集は「日本工学院専門学校」を取り上げてみました。今までの特集とは若干異なる記事になったと思います。それにしても卒業生や現役の学生の皆さんの活躍ぶりは、多岐に渡り素晴らしいものがあります。これからも蒲田の町を代表する学校として発展してください。

最後に、町会紹介は「東矢口一丁目町会」でした。近年、安全神話が崩壊した日本で、安心して生活していくためには、住んでいる人達の日頃からの協力が不可欠だということが感じられました。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五